興味・関心、意欲を高める漢詩教材の授業の工夫
－ 2年「漢詩」音読及び群読の指導を通して －

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 21
Ⅱ　研究の仮説 …… 21
Ⅲ　研究の全体構想図 …… 22
Ⅳ　研究の内容 …… 23
　1　中学校における国語科の基礎・基本をこうおさえる …… 23
　2　音読、朗読についての基本的な考え方 …… 24
　3　群読についての基本的な考え方 …… 26
　4　「新しい」評価観 …… 28
Ⅴ　授業実践 …… 31
　1　単元名 …… 31
　2　単元の目標 …… 31
　3　単元設定の趣旨 …… 31
　4　教材名 …… 31
　5　教材について …… 31
　6　教材研究 …… 31
　7　生徒の実態 …… 33
　8　本教材の指導計画 …… 35
　9　本時の指導 …… 36
　10　評価について …… 38
　11　授業を終えて …… 38
　12　資料 …… 39
Ⅵ　研究の成果と今後の課題 …… 40

宜野湾市立真志喜中学校
大　村　久　恵

＜国語科＞

興味・関心、意欲を高める漢詩教材の授業の工夫
－２ 年「漢詩」音読及び群読の指導を通して －

宜野湾市立真志喜中学校　教諭　大 村 久 恵

Ⅰ　テーマ設定の理由

中学校では中国の古典教材として、「故事成語」や「論語」、「漢詩」等を学習する。それらは時代を越え、我が国の文化や社会に大きな影響を与えてきた。特に「漢詩（唐詩）」は、平安時代の宮廷人の教養として必須のものであり、古今集以降の文芸に多大な影響を与えた。近代になっても、夏目漱石などの文学者が優れた漢詩を創作するほどである。現在でも好んで暗唱され、朗詠されて親しまれている。

中学校における古典指導のねらいは、「古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにする」と学習指導要領に示されている。しかし、生徒にとって古典学習は「難解でとっつきにくいもの」と受け止められてきた。漢文にいたっては、「見るのも嫌」と苦手とする生徒が多かった。

古典学習で生徒がつきあたる壁として考えられる原因は、

① 生活習慣、生活形態の違い

② 歴史的仮名遣いを含む文語表記の読みにくさ

さらに漢文学習には、

③ 漢字のもつ堅苦しさ

などもついてまわる。

教師のほうも、文法事項や語彙の説明、詩句の解釈と説明に多くの時間を裂き、生徒の興味や関心を育てる方向からそれていたのではないかとの思いがある。そのような反省を踏まえながら、①と②③では指導法の視点を変えた方法をさぐる必要を感じている。例えば、①の場合は視聴覚教材の活用、絵画表現と結びつけた指導の工夫、図書館での調べ学習、などが考えられるが、興味、関心をもたせるための指導の工夫が特に重要である。

初めて出会う古典教材では、②③の言語事項による抵抗感が大きな障害となるであろう。言語的抵抗には、発音・発声と語句・語彙、文法、漢字などがあるが、発音・発声を重視した音声表現を手掛かりに取り組んでいけば、語句・文法・漢字においても一定の成果が期待できるのではないか、と考えて今回は音声表現に重点を置いた指導の工夫を考えてみたい。

漢詩に親しむ態度を養う授業の手立てとして、指導過程の中心に音読を取り入れてみることにした。そして、次のような仮説をもとに、古典学習の入門期における効果的な音読法、表現としての朗読や群読のありかた、指導上の工夫などを研究したいと考え本テーマを設定した。

Ⅱ　研究の仮説

1・漢詩教材に音読の時間を設定し、習慣化することにより音読の楽しさ、おもしろさを身体の響きを通して体感し、漢詩への興味・関心、意欲が高まるだろう。

2・音読、朗読にグループ学習を位置づけることによって群読にまで読みが発展し、表現の喜びとともに漢詩に対する理解が作品、作者、時代、背景にまで深まるだろう。

III　研究の全体構想図

教育関係法規
- 日本国憲法
- 教育基本法
- 学校教育法
- 学校教育法施行規則

学校教育目標

(1) 心身ともに健康でねばり強く、実践力のある生徒
(2) 自ら進んで、よく学ぶ生徒
(3) 善悪を正しく判断し、行動できる生徒
(4) 明るく情操豊かな生徒

教育課程の基準改善の基本方針
- 心豊かな人間の育成
- 自己教育力の育成
- 基礎・基本の重視と個性教育の推進
- 文化と伝統の尊重と国際理解の推進

新しい学力観
- 自ら学ぶ意欲
- 社会へ対応する能力
- 基礎・基本の徹底

国語科の目標

国語を正確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

2学年目標

(1) 中堅学年としての自覚を持ち、自主的・計画的、継続的に学習できる生徒に育てる。
(2) 学校のきまりを理解し、決められたことはきちんと守れる生徒に育てる。
(3) 進んで学習や係活動に取り組み、責任を持って最後までやり抜く生徒に育てる。
(4) 正しい自己理解により、将来の望ましい進路の選択ができるような生徒に育てる。

学級の生徒の実態

(1) 男女とも学校生活の中での当番活動、係活動など自分の分担を責任を持ってやり遂げる。手が空いていれば気軽に他の生徒の手伝いをするなど、気持ちのいい雰囲気である。
(2) 授業中は真剣に教師の説明を聞き、学習に取り組む。しかし、活気に乏しい面がある。
古典の学習では積極的に意欲をもって学習に取り組もうとする生徒は13名で、苦手意識(嫌いを含む)を持つ生徒は18名いる。
ーアンケートよりー
(3) 音読に関しても、声を出すことに消極的な生徒が多い。

理解の目標
- 話や文章の内容に含まれているものの見方や考え方を理解し、自分の見方や考え方を広くすること。
- 文章の展開を確かめながら主題を考えたり、要旨をとらえたりすること。
- 自然や人物の描写などに注意して文章を読み味わい、自分の感想をまとめること。

研究テーマ

興味・関心、意欲を高める漢詩教材の授業の工夫
－2年「漢詩」音読及び群読の指導を通して－

学習目標

(1) 関心・意欲・態度
- 昔から長く親しまれ、日本の文学に多くの影響を与えて来た中国の詩や詩人に興味を抱き、その作品に親しもうとする。
- 古来からの普遍的な人間の心情に思いを馳せ、今の自分の心情を見つめようとする。

(3) 表現の能力
- 漢詩のリズムに慣れ、音読・朗読ができる。
- 漢詩の形式を学び、内容を把握し訳詩することができる。

(3) 理解の能力
- 詩に表現されている情景も含めて、詩に込められた作者の心情を捉えることができる。
- 詩人の生き方と詩とのかかわりを捉えることができる。
- 日本の文学作品への影響を比較して知ることができる。

(4) 言語事項
- 漢詩の形式についての理解を深め、対句などの表現技巧についても理解することができる。

表現の内容〔朗読〕

文章の内容や特徴に応じた読み方を工夫して朗読すること。

言語事項－発音・発声

言葉の調子や間の取り方などに注意すること。

古典学習の配慮事項

古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること。

研究の仮説

(1) 漢詩教材に音読の時間を設定し習慣化することにより音読の楽しさ、おもしろさを身体の響きを通して体感し、漢詩への興味・関心、意欲が高まるだろう。

(2) 音読、朗読にグループ学習を位置づけることによって群読にまで読みが発展し、表現の喜びとともに漢詩に対する理解が作品、作者、時代、背景にまで深まるだろう。

研究の内容

(1) 国語科の基礎・基本事項
(2) 音読、朗読についての基本的な考え方
(3) 群読についての基本的な考え方
(4) 新しい評価観

学級の実態調査

検　証　授　業

評価・反省

「学習目標」は達成されたか

研究のまとめ・反省・今後の課題

Ⅳ　研究の内容

1　中学校における国語科の基礎・基本をこうおさえる

学習指導要領の中学校国語科の指導目標には、次のように記されている。

中学校国語科の目標

国語を正確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

この目標で掲げられている「力」を整理してみると、次の3点にまとめられる。

① 国語を正確に理解し、適切に表現する能力
② のびやかな思考力や想像力と、豊かな言語感覚
③ 国語に対する認識を深め、国語を尊重する態度

⇩

育てるべき国語力

これを目指す国語力と設定し、この能力を身につけるためには何をどう勉強していけばよいのかを考え次表を作成した。

国語の基礎・基本的な学力

基本事項	基礎・基本の学力	学習指導要領との関連
1話題・題材・情報	話題や題材、情報を主体的にとらえ、自分の考えをまとめる。	Aア、Aウ、Aコ Bイ
2主題・要旨	文章の主題や要旨がとらえられるとともに、自分の考えに基づいてはっきりわかる表現ができる。	Aイ Bオ
3要点・要約	話や文章の要点をとらえ、要約する。	Bア
4構成・展開	事実と意見、中心の部分と付加的部分、段落の関係等を読み分けるとともに、組立てのしっかりした文章が書ける。	Aエ Bウ
5語句・語感	文脈の中で正しく語句の意味、用法をとらえ、語感を味わう。	Aオ、Aカ Bエ
6情景・心情	情景や心情の描写を味わうとともに、具体的、効果的な叙述の仕方を工夫して表現する。	Aオ、Aカ Bカ
7表記	漢字が正しく書ける。文章をよりよくするための各種表記の符号が適切に使い分けられる。	Aキ 言（1）（2）（3）
8朗読	音声・言葉遣い・速度等に注意して、適切な表現の朗読ができる。	Aク Bキ 言（1）ア
9聞く・話す	必要な内容を正確に聞き取ったり、相手の問いに正しく応答できる。	Aケ Aコ Bク
10書写	目的に応じて、文字を正しく丁寧に書けるようにする。 行書についての基礎的な書き方を知る。	言（3）

『教育調査研究所　1996年　紀要　第69号　中学校・国語科観点別評価の研究』　11頁から引用

※上記の表、「8朗読」が、今回の研究テーマとの関連である。

2　音読、朗読についての基本的な考え方

(1)　音読・朗読活動の備える性格

①　授業の個性化、個別化ができやすい。

音読・朗読活動は、読み、書き、描き、動き、話し、聞き、踊り、歌うなど、活動の種類も幅も他の活動とは比較にならないほど幅と奥行きを持ち、どの子供も様々な個性を持ったまま受け入れることができる。様々な学習活動を用意することが可能である。

②　「主体的」な学習が展開しやすい。

音読・朗読活動は、声を使い、体を使うという主体的な行動を起こすことによって初めて成り立つものであるから、どの子供も残らず学習の土俵の上に上がらざるを得ない状況を、自然に作り出すことができる。

③　「生きているままの言葉」を授業に取り入れることができる。

種々の条件の下では無限の意味を持ち得るのが言葉の本性である。言葉の意味はその言葉が使われる時の状況によって初めて決定するものであるから、状況の裏打ちを持つ生きた言葉を、生きている状態で扱うということは、言葉の学習には欠かせない条件である。音読・朗読活動では、言葉をそのままか、またはこれに近い形に持ち込むことができる。

④　総合的な学習の場を提供できる。

音読・朗読活動は言葉にできる限りの裾野を持たせ、自然に近い姿で総合的に子供たちの前に提出しようとする。このことから、授業は活動の幅をふくらませるにとどまらず、子供たちの学習への意欲や人間関係にもかかわる複合的な効果までを生み出す源泉にもなってくれる。『岩崎　明編　音読・朗読を生かした指導の方法－国語の授業を活性化する工夫－　光村図書』から

(4)　音読・朗読活動が持つ六つの機能

①　学習にとりかかる前に、教材に興味や親近感を抱かせる。

②　文字と音声を結び付ける。

文字で表記された言葉を音声化して、自分の中にある「言葉」と照応させるのが「音読」という作業である。この学習はともすると、変化のないドリルになりがちである。音読・朗読活動は、この単純、単調な学習に、全身活動として様々なバラエテイーを与えることができる。

③　新しい語彙を獲得する。

音読・朗読は「書き言葉の活動」に対応する「話し言葉の活動」というとらえ方ができる。音声化された言葉は「話し言葉」としての性格を持っている。「話し言葉」というものは、今生きている体を持ち、感情を胸に抱え、表情を見せ続ける話し手と共に存在する。「語彙を獲得する」ということは、その言葉の音声や文字を覚えることではなく、それらと具体的なイメージが結び付くことであり、子供たちは、すでに獲得しているこういう「話し言葉」を手がかりにして、次々と新しい語彙を獲得していく。

④　学習活動を盛り上げ、助けていく。

音読・朗読活動は、身体活動を含む総合的な活動なので、学習活動の種類、内容に無限なバラエテイーを持っている。このことから、多様な学習形態を持ち、子供の個性をより大幅に受け入れることができるので、全員の学習活動を活発にし、推進していくのに威力を発揮してくれる。

⑤　文章の読解の手がかりをつかませる。

作品の中の状況、人物、位置、人間関係、時間の関係、行動、心情の変化過程など、文字でえがかれた世界を具体的なイメージに作っていく読解の学習活動には、

文字を音声化する音読・朗読活動は、「文字言葉」と「抽象的な話し言葉」に頼らないので、際立った効果を発揮してくれる。

⑥ 作品の世界に浸り、素晴らしさを感じ取る。

音読・朗読活動にかかわる様々な表現技法を通して、自分の感じ、理解したことを自分なりに表現し合い、お互いの感じ、理解した作品の世界に触れ合い、味わうことを中心に学習すれば、音読・朗読活動を通した子供たちの創造性が、十二分に生かされるだろう。

『岩崎　明編　音読・朗読を生かした指導の方法ー国語の授業を活性化する工夫ー光村図書』から

(3) 指導上の留意点

① 発音、発声指導の留意点

子どもの音読の実態をみると、次の点が特に目につく。

ア　声が小さい。

イ　発音が不明瞭である。

ウ　助詞力み読みが多い。

エ　語尾をのばす読み方をする。

オ　早口である。

これらは小学生だけでなく、中学生・高校生でも同じことが言える。

（ア）大きな声で

胸いっぱいに空気を吸って大声を出すように心掛けさせる。これを長く続ければ必ず大声で話せるようになる。

（イ）歯切れよく

呼吸の仕方と共に、口、唇、舌の動かし方を適切にする。歯切れのよい発音はまず意識して発音することと習慣化することによって身に付くものである。

（ウ）助詞力み読みや語尾のばしをやめやせる

・むかし　ある　ところに　おじいさんと　おばあさんが　すんで　いました。

上の文の―の部分を強めて読むのが助詞力み読みである。「おばあさんが」の「が」は、「が行鼻濁音」でやわらかく鼻にぬけると耳ざわりではなくなる。

・それでエー　・だからアー　・するとオー　・　・・・・ましたアー

語尾をのばす言い方は現代若者、学生言葉の特徴で、音読だけでなく日常会話でもよく耳にする。

会話文では、読み手の主観を入れて話し言葉調がよいと思われるが、地の文は平調で淡々と読むほうが聞き手に安定感を与える。

(エ)適度な速さ

物語の音読では、地の文は淡々とゆっくりとした調子で読み、会話の部分は話し手の気持ちになって、ある部分は速く、ある部分はゆっくり読むように緩急をつけると、人物の気持ちの表現がうまくできる。速く読むほうが緊張感を表しやすい。

② 言葉として語るように読む

音読、あるいは朗読をする際に常に心掛けさせたいことは、文字を読むのではなく自分の言葉として語るように読むということである。

物語における人物の心理心情は、人物の行為・行動と深くかかわり、また場面の情景や人物の置かれた環境、背景とも無縁ではない。これらと絶えず結び付けて読み方の調子を考えなければならない。教材の深い読み取りが音読・朗読の原動力になるのである。

『石田佐久馬編　読み聞かせから音読・朗読へ　東洋館出版社』から

3　群読についての基本的な考え方

(1)　子供と群読

もともと子どもは声を出すことが大好きである。「声が小さい」といわれるのは、たまたま授業というような評価を受ける場面で、一人改まって読み、話すとなって固くなり、ぼそぼそとした声になっただけといえる。

子どもが好んで大きな声を出す場面は、群れをなして、遊びやクラスやクラブなどの仲間と一緒に声を出すときである。

子どもたちが声を合わせるのは、仲間の理念や感情や意思を伝えたり、友情や連帯を確認したり、さらには仲間としての紐帯を強めていくことができるからである。一人で話しかけ語りかけるより、強い訴求力、伝達力、宣伝力があるうえ、遊びに快いリズムを与え、浮き浮きしたはずみをつけ、いっそう楽しい遊び世界を広げることに役立つからである。仲間と一緒に声を出していると、からだが軽くなり、心が開き、やる気が湧いてくる。

(2)　群読の機能

群読は子どもの言語能力高める。みんなでリズムにのって一緒に声を出すから、つられて声を出すうちに、しだいに身体を開き、その身体をとおして言語を獲得し、その能力を高めていく。

また、群読は日本語をさらに豊かにする力を育てる。日本の伝統的な音声文化に含まれている修辞（レトリック）や朗誦術（デクライメイション）を現代によみがえらせることで、日本語をさらに豊かなものにする。

ついで、群読は学級、学年、全校の自治的文化活動として、儀式や行事に有効な表現形式になっている。

そして、群読は国語の授業を活性化させる。学習指導要領の改定において、「音読」が重要視されるようになり、その発展教材として注目されている。

(3)　群読づくりの手順

群読はまだ日も浅く、朗読と演劇をつなぐ一種の中間芸術とみられているようである。群読のために書かれた作品も少ない。

指導論もまだ確立していない。ものさしになるような標準的な指導過程も方法論も確立せず、朗読や演劇、合唱などの指導に準拠して実践されているようである。今のところ指導する教師の工夫が強く問われる活動といえる。

①　群読の導入から展開まで

ア　教師またはリーダー・係の用意した群読教材を使って、みんなで群読をやってみる。そのなかで、分読や表現技法を少し教える。

イ　その教材を使って、グループごとに、グループの創意を加え、分読の分担をし、練習して発表し、批評しあう。

ウ　複数のやさしい作品を用意し、各自に選択させて作品ごとの発表グループをつくる。グループは、その作品を用いて群読をつくり、発表し批評しあう。

エ　群読活動の目標を決め、グループごとに群読に取り組み、発表会を開き、鑑賞する。

②　群読づくりの方法（上記イ、ウの場合）

ア　まず全員で声をあわせて教材を読む。

イ　一文読みをする。一人が一文だけ読み、次々に読み回していく。このとき、読みの間違いやアクセントなど批評しあってなおす。

ウ　読み方を決める。ここは強く読もう、ここはゆったりと読もうなど文の内容にあわせて、話し合って決める。

エ　ウで決めた読み方にしたがって全員で読む。一人ひとりが、完全にウで決めたように読めるまで繰り返し読む。暗唱するくらいまで読む。

オ　また、一文読みをする。ウで確認したように読んでいるかどうか、お互いに注意し合う。
カ　どう分読するか話し合う。まずパターンを決めてから、細部を検討していく。また、声に出して表現しながら修正していく。
キ　分読の分担をする。ソロは誰、アンサンブルは誰と決める。
ク　各自自分が読むところを確認する。
ケ　全員で読むが、自分の分担以外のところは、声を小さくして読む。
コ　分読して読む。自分の分担だけ読む。
サ　発表隊形に並んで練習する。誰かに聞いてもらって、批評してもらうといい。
シ　発表会を開く。

③　指揮者について。

大勢で群読するときには、合唱のようにパート別に並ぶ。アンサンブル、コーラス1、コーラス2とそれぞれ固まり、ソロは中央前列か端に配置する。そうなったら、指揮者をおくとよい。

④　評価の観点

ア　取り組み過程でのグループの協力性はどうか。
イ　教材解釈はどうか。
ウ　分読分担は適切か。
エ　表現はよく工夫されていたか。
オ　感動を与えたか。

(4)　群読の主な技法

①　分読の方法

ア　役割読み用法
(ア)　配役を決めて読む。
(イ)　地の文の読み。（普通は「ナレーター」「説明役」「語り手」が読む。）
イ　ソロ、アンサンブル、コーラスの用法。文の内容から判断する。
ウ　異文平行読み。ふたつ以上の違った文を同格に読む。
エ　バック・グラウンド用法。異文平行読みの一種だが、片方が背景音。
オ　漸増法。つけ加わる。
カ　漸減法。漸増法の反対。減っていく。
キ　乱れ読み法。バラバラに読む。だいたい一緒に始まり、だいたい一緒に終わる。
ク　追いかけの用法。
ケ　わたりの技法。分読して最後に繰り返して全員で読む。
コ　ほかに、重唱、輪唱、囃子言葉や合いの手用法。

②　表現の技法

ア　高出し。大きな声で出す。
イ　修羅場読み。戦闘場面の読み。
ウ　繰り返し。繰り返した言葉は小さく表現するのが普通だが、大きくすることもある。
エ　ストップ・アンド・リプレイ。同じ箇所を何回も繰り返す。やや早めのテンポで漸増させていく。
オ　移動、オーバー・ラップ。
カ　終末効果。「盛り上げ」「落とし」がある。気取って大仰に表現する。
キ　ほかに、点・丸の交換、頭づけ、転調、破調など。

③　演出

ア　隊形
イ　指揮。大勢の場合指揮者が必要。

ウ　動作、伴奏、効果、照明、扮装、衣装、道具などは最小限。
エ　擬声語は道具を使わずに口頭で表現する。
④　発声の基本
明瞭、大小、強弱、間、抑揚、息継ぎ、緩急など。
『家本芳郎著　群読をつくる　高文研』から

4　「新しい」評価観

(1)　学力観と評価

学力という概念は、時代や社会の教育に対する期待によってその概念規定が異なってきた。

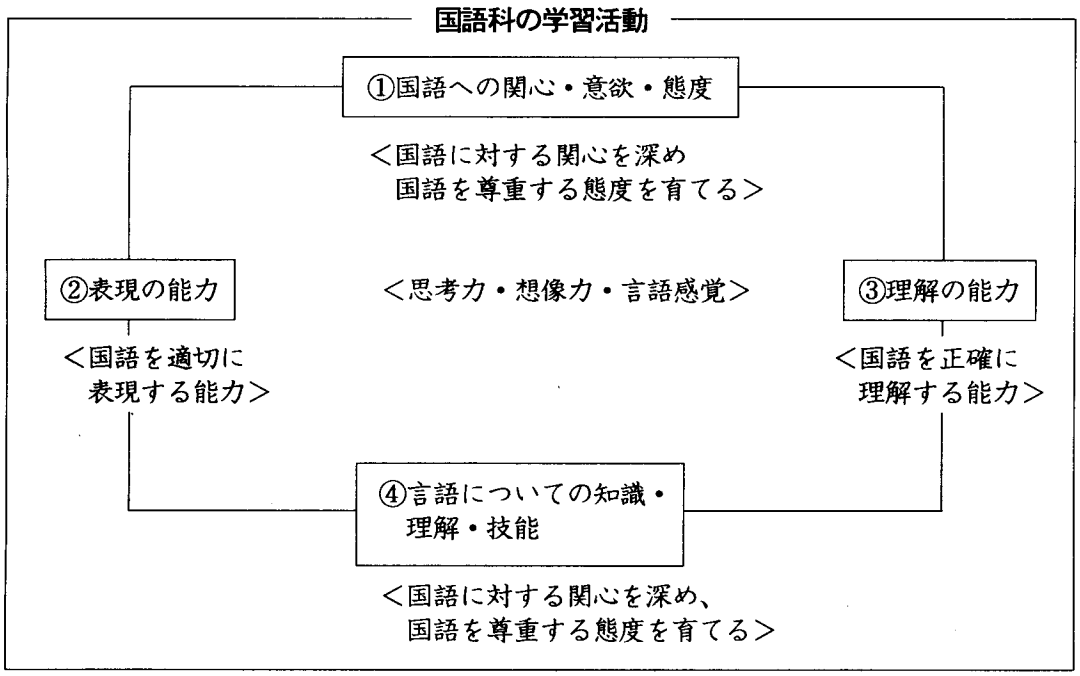
学習指導要領の基本的なねらいは、

・自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力を育成する。
・基礎的・基本的な内容を重視する。
・個性を生かす教育を充実する。

の３点である。

現在では、「人間として生きて行くための幅の広い力」として「学力」を捉え、学校、家庭、地域がバランスをとりあい「生きる力」を育むことが基本的方向であるとしている。（第15期中央教育審議会第１小委員会・中間報告）

国語の学力を四つの観点項目で整理すると以下の図になる。



(2)　指導と評価の一体化

一般的に「評価」を機能面から分類すると、

①　学習者が自らの伸びをチェックできるもの。
②　教師自らの指導・援助の改善のための資料。
③　編成・選抜等に用いられる序列のためのもの。

に分けることができる。これまでは、③の目的の評価が大いに使われてきたが、今後は、生徒一人一人が生涯にわたって自己実現を果たし、社会に主体的に対応していく

ことができるようにするために、①と②の評価を研究し実践していく必要がある。

国民として必要な学力についての共通理解が確立すれば、その習得のためにはいろいろな学習スタイルが考えられる。

評価が指導につながっていくためには、生徒を多面的に捉えることのできる「場」を意識的に設定すること、一人一人のもつ個性を正しく認識し、できるだけその一人一人に合ったやり方で本人を伸ばしていく手立てが考えられていくのが理想である。

本当の勉強が始まるのは、自ら勉強することにおもしろさや喜びを感じた時からだという。そういうチャンスの場を多く作ることが教師の任務ではなかろうか。

次の表は、評価観点を明確にするためにまとめた「学年別評価観点表」の、第2学年用である。日常的な学習活動の中でさまざまに評価の「形態」を考察していき、自ら学ぶ姿勢を培うために生かしたい。

第2学年　評価観点表

観点		評価の基準	評価事項
国語への関心・意欲・態度	国語に対する関心をもち、自ら進んで表現を工夫したり、読書したりすることにより、自己を豊かにしようとする。	①国語への関心	・国語について関心をもち、進んで理解を深めようとする、など。
		②自分の考えの確立	・自分の考えをはっきりさせる、など。
		③表現への意欲 ・様々な人々と話したり、多様な種類の文章を書いたりして、進んで自分を表現しようとする。	・自ら進んで様々な人々と話そうとする。 ・進んで朗読や音読をし、自分の表現を豊かにする。 ・自分の考えを様々な相手に応じて表現しようとする、など。
		④表現の工夫 ・目的や場面、相手にふさわしい、より適切な表現を目指そうとする。	・広く生活の中から様々な素材を集める。 ・素材から主体的に話題や題材を選び出す。 ・直接、間接に経験したことを多様に表現する、など。
		⑤聞くことへの意欲 ・積極的に相手の話を聞き、自分のものの見方や考え方を発展させ、深めようとする。	・積極的に相手の話を聞こうとする。 ・主題や趣旨を素早く正確にとらえようとする。 ・正確に内容をとらえ、理解する能力を高めようとする、など。
		⑥読むことへの意欲 ・積極的に読書に親しみ、様々な本を読んで、自己を豊かにしようとする。	・自ら積極的に様々な本や文章を読む。 ・主体的に読む本や文章を決め、それを広げる。 ・様々な文章の内容を正確に理解し、自分の生活に役立てようとする、など。
		⑦言語への態度 ・言語にたいする関心を高め、その理解や認識を進んで深めようとする。	・発音、発声、速度、音量、言葉の調子、リズム、間の取り方、言葉の使い方などに関心をもつ。 ・それらを自分の表現に役立てようとする、など。
表現の能力	広く生活の中の多くの素材から、主体的に話題や題材を選び、自分のものの見方や考え方を深め、立場を明らかにしながら、表現や構成を工夫して、適切に話したり文章に書いたりする。	①表現の力 ・適切に話題や題材を選び、自分のものの見方や考え方を深め、目的を踏まえ、立場を明らかにしながら、構成を工夫して表現することができる。	・話題・題材：広く生活の中から積極的に多くの素材を集めることができる。 ・主題・要旨：自分の考えを深め、立場を明らかにして、主題や要旨がはっきり分かるように表現できる。 ・内容と構成：事実と意見、中心の部分と付加的な部分などの関係がはっきり分かるように、全体の構成を工夫して表現できる。 ・叙述・描写：物事の場面や状況・心情などがよく分かるように、適切な叙述の仕方を工夫して表現ができる。 ・話し合い：話し合いの方向をとらえて自分の考えをまとめ、その場の目的に沿って的確に話せる。
		②表現の適正さと工夫 ・目的や立場にふさわしい適	・語句の選択：表現しようとする事柄、内容、文脈にふさわしい適切な語句を選ぶことができる。

観点		評価の基準	評価事項
		切で正確な表現のために、様々な工夫をすることができる。	・構文・文法：文の形を工夫して表現できる。 ・「理解」との関連：優れた表現を求め、特色をとらえて自分の表現に役立てることができる。 ・朗読・音読：文章の内容や特徴に応じた読み方を工夫して朗読や音読ができる。 ・話し方：自分の考えや気持ちを、相手の場や状況に応じ、適切な言葉遣いで話せる。
理解の能力	話や文章の中心的な部分と、付加的な部分を区別し、構成や展開に即して主題や要旨をとらえ、事実と意見、説明と描写などに注意して、自分の見方や考え方を発展させながら内容を正確に理解する。	①理解の力 ・中心部分と付加的部分を区別し、構成や展開に即して主題や要旨を的確にとらえ、事実と意見、説明と描写などに注意して、自分のものの見方や考え方を発展させながら、内容を正確に理解する。	・内容の把握：話や文章の展開に即して内容を正確にとらえることができる。 ・主題や要旨：文章の展開を確かめながら主題を考えたり、要旨をとらえたりできる。 ・ものの見方と考え方：話や文章の内容に含まれているものの見方や考え方を正確に理解し、自分の見方や考え方を広く豊かなものにすることができる。 ・表現の仕方：事実と意見、説明と描写などの表現の違いに注意して読むことができる。 ・鑑賞・感想：自然や人物の描写を読み味わい、自分の感想や意見をまとめることができる。
		②理解の要素 ・話や文章の内容を把握するために、表現に即して構成・展開などを理解することができる。	・内容の把握・要約：話や文章の展開を的確にとらえ必要に応じて的確に要約できる。 ・話し合い：話し合いにおけるそれぞれの発言の共通点と相違点とを聞き分け、自分の考えをはっきりさせることができる。
言語についての知識・理解・技能	表現と理解に役立てるための音声・語句・語彙・文法・漢字など国語に関する基礎的な事項や国語の特質について正確に理解し、それらの知識を身につけている。 書写では、楷書と行書、それらに調和した仮名の書き方を理解し、字形、大きさ、配列、配置などを整えて効果的に書く。	①発音・語句・文法などに関する事項	・発音・発声：話す速度、音量、言葉の調子、間の取り方、言葉の使い方などに注意することができる。 ・語句：慣用句の表す意味や類義語の意味の違い、対義語との関係などに注意することができる。 ・語彙：抽象的な概念などを表す多様な語句についての理解を深め、語彙を増やすことができる。 ・文法(文章論・文論)：文章中における段落の機能や役割を考え、文と文との接続関係などを考えることができる。（文章論） ：文の中の文の成分の順序や照応、文の組立てなどについて考え、理解することができる。(文論) ・文法(語論)：単語の活用について理解し、助詞や助動詞などの働きに注意することができる。 ・日本語の特色：共通語と方言の違いや果たす役割などについて理解できる。
		②漢字に関する事項	・漢字を読むこと：第1学年までに学習した常用漢字に読み慣れ、その他の常用漢字のうち300～350字程度の漢字を読むことができる。 ・漢字を書くこと、使うこと：学年別漢字配当表の漢字を身につけ、文章(文)の中で適切に使うことができる。
		③書写に関する事項	・字形・大きさ・配列・配置：適不適を自分で判断し、効果的に書くことができる。 ・漢字と仮名、楷書と行書：漢字の楷書と行書、それらに調和した仮名の書き方を理解し、適切に書くことができる。

『教育調査研究所　1996年　紀要　第69号　中学校・国語科観点別評価の研究』
7－10頁、19－23頁から引用

V　授業実践

国語科学習指導案

平成８年12月19日　３校時
真志喜中学校　　２年６組
男子18名　女子18名
授業者　　大　村　久　恵

1　単元名　古典に親しむ

2　単元の目標　　古典の文章に読み慣れ、古人の心に触れる。

3　単元設定の趣旨

中学生は、二年生の二学期になるとずっと落ち着きが出てきて、外に向かっていた心が自己の内へ向かい始める。そういう時期に価値ある古典に触れて、人間の生き方・考え方に思いを巡らすことは意義のあることである。また、このころは、美しいものを求める時期でもある。文章の美しさに気づかせることも、ここでの一つの目標と考えたい。

古典は、長い時の流れを経てもなお、後の時代の人々に多くの感動、生きるうえでの知恵を与えてくれる。言ってみれば、民族の言語文化遺産であり、時代を超えた普遍的な人間性の真実がこめられたものである。それを子孫へ継承するためには、主体的かつ積極的な読みの姿勢が必要になる。読むことによって、古人の生活や心に触れ、自分の生き方に思いを巡らしたり、日本人の伝統的な精神や生活感情を発見したりする古典学習にしたい。

現代の中学生が、日常古典に触れる機会はきわめてまれなことである。そのことから、学習に取り組む前から、古典は難解なものという先入観で身構えてしまう傾向にある。その先入観を取り除き、興味を持たせる工夫の一つとして音読の有用性に着目して、今回の研究主題に迫りたいと考えている。

古典に親しむ方法はさまざまあるが、まず音読を通して文語のリズムに慣れ、表現のしかたや文体になじむこと、次に古人の深い思索、鋭い観察力、豊かな感受性、表現の息づかいに触れ、自分の生き方・考え方・感じ方・表現のしかたなどに思いを巡らすことが、二年生の主たる学習になろう。古文理解に必要な言語事項は、教材に即し必要に応じて、解釈・鑑賞にそう形で学習させたい。

4　教材名　漢詩の風景

5　教材について

中国の言語文化（漢字、漢語、中国古典）が我が国に与えた影響は計り知れない。特に唐詩は平安時代の宮廷人の教養として必須のものとなり、勅選漢詩集を生み、古今集以下の和歌、あるいは随筆、物語に大きな影響を与えた。

ここでは、数多い漢詩の中から、現代性もあり、表現も優れていて、生徒の心情に触れ共感をよぶものという観点から四編選んでいる。三編は唐詩、一編は日本漢詩で、いずれも絶句である。三編は、いずれも唐代を代表する詩人の作品で、特に李白・杜甫は、西行・芭蕉などの生き方に強い影響を与えた。日本漢詩は、江戸時代の教育者広瀬淡窓の詩である。

これらの詩について、その解説文により、①それぞれの詩の情景や心情　②それぞれの詩の表現の特徴　③詩人の生き方や詩の背景をなす時代的特徴などを学ばせたい。また、それらを音読、暗唱することによって、表現のリズムや響きを味わわせたい。そして、それらの学習を通して、日本人が中国の文化を採り入れていった過程に思いを巡らせ、漢詩に対する興味と関心をもたせたい。各詩は書き下し文で読むようにしてあるが、訓読文を並記して学習上の参考としている。このような訓読法の工夫によって、外国語である中国の文章が日本人に容易に受け入れられていったのである。

6　教材研究

(1)　教材の目標

①　漢詩に表現されている風景や心情を読み味わわせる。
②　漢文の読み方と、漢詩の構成やきまり、特色を理解させる。
③　読み取りを生かし工夫して、漢詩を朗読・群読させる。

(2) 作品について

題　名	作者	時代	形式	作　品　解　説
春暁	孟浩然	唐時代	五言絶句	・有名なこの詩の作者孟浩然の野人肌の生き方、ライフスタイルについても言及している。時間に追われ、忙しく生活する現代人に、大自然の中で自然とともに生きることの価値を強く訴えていることをとらえさせようとしている。
絶句	杜甫	唐時代	五言絶句	・見事な自然の描写とそれを見つめる作者の悲しみがひしひしと伝わる優れた作品である。杜甫は戦乱のため、故郷を離れ、遠い異郷の成都で望郷の念にかられながら、その願いがかなえられない。見つめる春の景色が美しければ美しいほど、悲しみも増していくという心情に是非気づかせたい。さらに、発展教材として「春望」の指導も効果的であるので、今回は、この作品にも取り組むことにしている。
黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る	李白	唐時代	七言絶句	・悲しみにあふれる詩である。雄大な景色の中、小さく見える友の姿は別れの悲しみをいっそう大きくする。目に見える景色をそのまま描写してあるだけなのに、作者のつらさが読み手にひしひしと伝わってくる。広大な長江と果てしない空、それに対比する小さな舟、というダイナミックな構成に気づかせたい。
桂林荘雑詠諸生に示す	広瀬淡窓	江戸時代	七言絶句	・日本人が漢詩を自分のものとして充分消化していることが分かる。起居を共にする塾生の暮らしぶりは、そのまま中学生の学校生活と共通するものがあり親しみやすい作品である。

(3) 漢詩学習における観点別達成目標

観　点		関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語事項
観点別達成目標		・昔から長く親しまれ、日本の文学に多くの影響を与えてきた中国の詩や詩人に興味を抱き、その作品に親しもうとする。 ・古来からの普遍的な人間の心情に思いをはせ、今の自分の心情を見つめようとする。	・中国の詩のリズムに慣れ、滑らかに音読、朗読することができ、あわせて暗唱することもできる。 ・中国の詩の形式を学び、内容を把握し、そのうえで訳詩を作ることができる。	・詩に表現されている情景も含めて詩にこめられた作者の心情を、用いられている表現技巧を参考にしてとらえることができる。 ・詩人の生き方と詩とのかかわりをとらえることができる。 ・日本の文学作品への影響を、比較を通して知ることができる。	・中国の詩の形式についての理解を深め、また対句などの表現技巧についても、その効果も含めて理解することができる。
評価場面		・3編それぞれの詩のリズムに注意を払いながら、大きな声で音読する場面。 (音読の様子)	・3編の詩のうち1つを選び、朗読、群読をする場面。	・3編の詩の内容について語句に即して理解していく場面。 (ノート・発言)	・詩の形式についての知識を学び、理解を深める場面。 (ノート・発言)
具体的達成目標		・3編それぞれの詩を大きな声で繰り返し音読することで詩のリズムを体得しようとする。	・リズムに慣れて滑らかに朗読、群読できる。	・3編の詩それぞれに表されている情景や心情について、脚注等を参考にして理解し、各詩人の生き方をとらえることができる。	・五言絶句、七言絶句といった詩の形式を知り、押韻、対句などの用法ついても理解することができる。
評価判定基準	十分満足できる	・素読音読みから書き下しの音読まで、積極的に大きな声で詩のリズムを味わおうとする。	・リズムに注意し、内容がよくわかるように理解の深さが伝わる朗読、群読ができる。	・孟浩然の詩についてはそこに描かれている情景を詳しく説明でき、李白の詩については作者の心情について語句に即して説明することができ、杜甫の詩については情景に含まれている心情を発表することができる。	・定型であること、それぞれの形式の呼称について覚えることができ、押韻についても理解を深め、すぐに指摘することができる。
	おおむね満足できる	・先頭切って大きな声は出せなくても、範読について大きな声で読んでいる。	・滑らかに音読、または群読することができる。	・脚注や説明を参考に各詩の直訳を正しく書き、説明のあった各詩人の生き方にもふれて内容を理解することができる。	・各形式の差異について正しく指摘することができ、また押韻が必ず用いられていることを知識として定着することができる。
	努力を要する	・大きな声を出すことができず、また大きな声を出すよう促しても出そうとしない。	・最初のころと変わらず、すらすらと読むことができない。	・直訳を聞いても詩について理解することができず、詩人の生き方にまでは考えが及ばない。	・押韻について、その仕組みを理解することができず、また詩の形式の呼称についても正しく言い分けることができない。

(4) 漢文の読み方

漢文は、もともと中国の文章であるから、原文は漢字だけを連ねたものである。日本人は、これを自分たちの言葉で読みこなそうと、さまざまな工夫をしてきた。

① 白文、訓読文、書き下し文について。

② 訓点［句読点・送り仮名・返り点（レ点、一・二点、上・中・下点、甲・乙・丙点）］について。

(5) 漢詩の基礎知識

① 漢詩学習の最初なので、詩形、構成（起承転結）について。

② 漢詩の表現法（独特の言い回し、助詞をつけない表現、体言止め、倒置法、対句法）について。

(6) 発展教材としての「春望」（杜甫）

3年生の古典学習で「奥の細道」（松尾芭蕉）を学ぶが、その事前学習としてぜひとりあげたい作品である。今回、作品のもつ現代性にも着目させながら、群読として取り組むことにした。杜甫の苦悩は現代の中学生にも共感できる内容と言える。

7 生徒の実態

(1) 観点別に見て （アンケートの結果から）

関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語についての知識・理解・技能
古典の学習が好き（どちらかといえば好きを含む）と答えた13名(男子8名、女子5名)の中で、「古典の世界に興味がある」と答えた生徒は9名（男子6名、女子3名）いる。嫌い（どちらかといえば嫌いを含む）と答えた18名は、男子8名女子10名が苦手意識を持っている。その理由として「古典の世界に興味がないから」と答えた生徒が11名（男子5名女子6名）という数字はかなり大きな意味を持っており、今後の学習指導に示唆を与えている。	音読に関しては好きな生徒4名（女子のみ）、嫌いな生徒5名（男子3名、女子2名）である。日常の授業でも音読に積極的な生徒は少ない。教師に促されて声を出す場面が多かった。	古典の学習において「古人の生活の様子や、ものの見方、考え方」を理解することは、重要な意味を持っている。そのことに「興味がある」と答えた生徒は9名、「興味がない」と答えた生徒が6名いる。興味を持たせる工夫の必要性を感じる。	古典の学習が苦手な生徒は、「歴史的仮名遣いが読めない」「口語訳ができない」ことを理由としている。「古典の表現や文法に重点を置いて学習してきた」と答えた生徒が16名もいる。また「これからも力を入れたい」とする生徒が12名いる。きわめて前向きな姿勢といえる。

(2) アンケート集計表 （男子16名 女子15名）

問 これまでの古典の学習を通して感じたことに答えなさい。			男子	女子
1	これまでどんなところに重点を置いて古典学習を進めてきたか三つ選ぶ。	ア 時代(歴史)背景を知る。	8	8
		イ 歴史的仮名遣いに慣れる。	10	9
		ウ 先生の読みを聞く。	4	6
		エ 積極的に音読する。	2	0
		オ 口語訳をする(語句の意味を知る)。	7	6
		カ 古人の生活の様子や、ものの見方・考え方を知る。	9	5
		キ 古典の表現法や文法を学ぶ。	8	8
		ク その他(していない)。	0	1
2	古典の学習は好きか。	ア 好き。	2	1
		イ どちらかといえば好き。	6	4
		ウ どちらかといえば嫌い。	8	7
		エ 嫌い。	0	3
	2で「ア」か「イ」	ア 古典の世界に興味があるから。	6	3

3	と答えた人はその理由を三つ答える。	イ　歴史的仮名遣いが読めるから。	3	2
		ウ　音読が好きだから。	0	4
		エ　口語訳ができるから（語句の意味がわかる）。	2	2
		オ　古人の生活の様子、ものの見方・考え方に興味があるから。	4	5
		カ　その他（内容が楽しい・歴史上の人物の話がおもしろいなど）。	2	1
4	2で「ウ」か「エ」と答えた人はその理由を三つ答える。	ア　古典の世界に興味かないから。	5	6
		イ　歴史的仮名遣いが読めないから。	4	2
		ウ　音読がいやだから。	3	2
		エ　口語訳ができないから(語句の意味がわからない)。	5	7
		オ　古人の生活の様子、ものの見方・考え方に興味がないから。	4	2
		カ　その他（ややこしい・おもしろくないなど　　）。	0	4
問　これまでの古典の学習を通して感じたことに答えなさい。				
5	これまでに学習した古典作品の中で、印象に残っているものを二つ選ぶ。	ア　むかしむかし、うらしまは。	12	10
		イ　「竹取物語」から蓬莱の玉の枝。	14	14
		ウ　故事成語。	3	0
		エ　特にない。	2	5
6	これから古典の学習を通して特に学習したいことを三つあげる。	ア　時代(歴史)背景を知る。	8	8
		イ　歴史的仮名遣いに慣れる。	10	8
		ウ　先生の読みを聞く。	2	1
		エ　積極的に音読する。	2	0
		オ　口語訳をする(語句の意味を知る)。	10	7
		カ　古人の生活の様子や、ものの見方・考え方を知る。	7	9
		キ　古典の表現法や文法を学ぶ。	6	6
		ク　その他（特にない　　）。	1	1
問　漢文・漢詩について答えなさい。				
7	漢文・漢詩という言葉を知っていたか。	ア　知っていた。	2	1
		イ　聞いたことがなかった。	14	14
8	7で、「ア」と答えた人は、知っていたことを書く。	・漢字だけの文、詩。	2	0
		・中国の文、詩。	0	1
9	7で「イ」と答えた人は、言葉から学習内容を想像して書く。	・漢字だけの文、詩。	10	10
		・中国の文、詩。	1	2

(3)　全般的な状況

男女とも学校生活の中での当番活動、係活動など自分の分担を責任を持ってやり遂げる。手が空いていれば気軽に他の生徒の手伝いをするなど、気持ちのいい雰囲気である。

授業中は真剣に教師の説明を聞き、学習に取り組む。しかし、活気に乏しい面もある。音読に関しても、声を出すことには消極的な生徒が多い。今回、特に音読を中心に授業を組み立てたいと考えたのは、この学級の表現への意欲を高めたいとの思いがあったからである。

8　本教材の指導計画（9時間）

◎印・・指導のめあて

過程	時間	学習活動	指導上の留意点	評価 観点別	評価 方法
第1次	1	◎内容の大要をとらえる。		（理解）文章の展開を確かめながら主題を考えたり要旨をとらえたりする。	
		◎漢詩に読み慣れる。	・音読を楽しく（様々な形態で）。 ◇斉読　◇反復読み　◇リレー読み　など	（関・意・態）積極的に読みに参加しているか。	観察法
	2	◎春暁を読み味わう。		（関・意・態）意欲的に学習に取り組もうとしているか。	観察法
		◎漢詩の形式や構成を理解する。	・基礎基本を押さえる。		
		◎他の三編を読み味わう。	・音読を効果的にとり入れる。		
	3	◎漢詩・漢文と日本とのかかわりを理解する。		（理解）ものの見方や考え方。	
		◎漢詩の語法や表現に慣れる。	・基礎基本を押さえる。		
第2次		◎朗読して味わいを深める。	・音読から朗読へ。	（鑑賞）自然・人物の描写などに注意して読み味わう。	評価法
	4	◎群読にして表現する。 ・グループ編成 ・シナリオ作り ・練習		（言語）言葉の調子や間の取り方。	観察法
	5	練習	・協力し合うようにさせる。		
	6	〃	・実際の動きを入れたり、シナリオを再検討したりして表現の工夫をさせる。	（表現）内容や特徴に応じた読み方を工夫して朗読をする。	評価法
第3次	7	◎中間発表会。	・発表会の意義を理解させる。 ・司会も決める。	（表現）群読の効果を工夫しながら表現する。	評価法
	8	◎群読発表会。（本時）	・発表会の意義を再確認させる。	（鑑賞）他のグループの発表を聴いて、自分の感想をまとめる。	評価法
	9	◎感想を書く。 ◎ビデオで自分の表現を確認する。 ◎授業の反省・感想。		（鑑賞）自分のグループの発表を客観的に聴き評価する。	自己評価

9　本時の指導

(1)　本時の指導目標

①　詩の内容や特徴に応じた読み方で朗読（群読）ができる。

②　各班で練習した成果を発表することができる。

③　他の班の発表を聞いて感想をまとめることができる。

(2)　本時の仮説

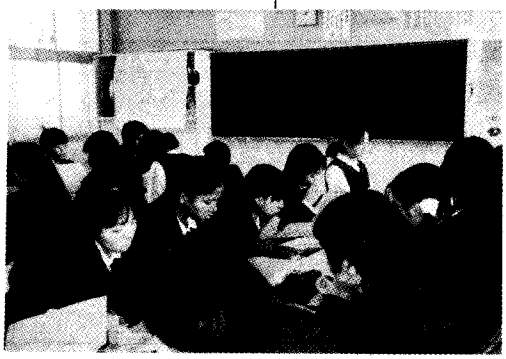
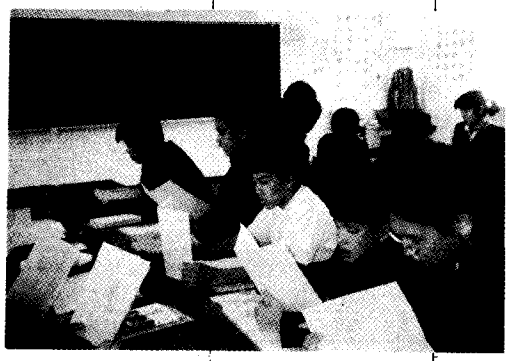
①　音読、朗読を通して文語のリズムに慣れ、漢詩表現の喜びを体感するとともに、興味・関心が高まるだろう。

②　グループ学習を位置づけることによって、生徒相互が教え合う喜びを持つとともに群読の楽しさを味わうことができるだろう。

③　相互に発表を聞いて、作品への理解が深まるだろう。

(3)　本時の授業展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価 観点別	評価 方法
導入	1、中国語による朗読を聞く。 2、全員で音読をする。 3、各班で群読の練習をする。	・カセットテープで中国語の朗読を紹介する。 ・これから始まる発表会にスムーズに移るために、心の準備を兼ねて元気に音読させる。さらに、群読の練習もする。	（関心・意欲・態度） 日本語と中国語の違いに気づき、日本語のもつ美しさが、群読でどう表現できるか、期待を持って今日の発表会にのぞむ契機にしているか。	観察法
展開	4、群読発表会。 （司会　2名） ◆1班から順に前に出て発表する。 ◇1班－春暁・孟浩然	・司会の進行に集中させる。 ・スムーズに前へ出るようにさせる。 ・各詩に合わせた音楽テープをバックに流して、発表する楽しさが味わえるよう工夫する。 ・聞き所、評価項目などは事前に示しておく。	（態度） 発表会の主旨をとらえて積極的に参加しているか。	観察法
	 ◇2班－絶句・杜甫 			

展	◇3班－黄鶴楼～・李白 			
	5、他の班の発表を聞いて、その感想を学習プリントに書く。		(表現) 声を合わせ、工夫して表現できたか。 (鑑賞) 表現の工夫や完成度、作品の美しさなど。	評価法 評価法
	6、範読をテープで聴く。	・音読と群読の違いを再確認し、表現の工夫による効果の可能性を今後の学習につなげるよう配慮する。	(鑑賞) 音読と群読の違いを意識しているか。	評価法
	7、発表会終了の前に、「春望」を全員で音読→群読をする。	・各班の発表を終えた満足感と、さらに大人数で声を合わせるダイナミックな感動が味わえるよう工夫する。	(表現) 群読が、人数の多少でどう違うか意識しているか。	観察法
開				
まとめ	8、発表会終了。 グループ発表を自己評価し、他のグループの感想も持つ。 9、本時のまとめをし、次時のねらいを聞く。	・発表会の労をねぎらう。 ・次時の予告をする。		自己評価

10 評価について

(1) 本時の評価

時間の流れ・生徒の活動		観点・方法	評価の基準	名前			
導入	・中国語の朗読を聞く。	関心・意欲・態度（観察法）	・日本語と中国語の違いに気づき、日本語のもつ美しさを群読でどう表現できるか、期待をもって今日の発表会に臨む契機にしているか。				
展開	・群読発表会。	関心・意欲・態度（観察法）	・発表会の主旨を捉えて積極的に参加しているか。				
	・各グループ分担の発表をする。	表現（評価法）	・声を合わせ、工夫して表現できたか。（一人一人の読みの工夫）（みんなの協力の様子）				
	・他の班の発表を聞く。	鑑賞（評価法）	・表現の工夫や完成度、作品の美しさなど。（一人一人の読みの工夫）（みんなの協力の様子）				
	・範読テープによる朗読を聞く。	鑑賞（評価法）	・音読と群読の違いを意識しているか。				
	・全員で「春望」を群読する。	表現（観察法）	・群読が人数の多少でどう違うか、意識しているか。				
まとめ	・各自、感想と反省をする。	自己評価	・自分の読み方の工夫をどうしたか。				
			・声の組み合わせの工夫をどうしたか。				
			・みんなで協力できたか。				

以下同様に評価する（省略）

（A）十分満足できる　（B）おおむね満足できる　（C）努力を要する

(2) 第2学年　漢詩評価観点表

（A）十分満足できる　（B）おおむね満足できる　（C）努力を要する

観点	評価の基準	評価事項	名前		
国語への関心・意欲・態度	③表現への意欲	・進んで朗読や音読をし、自分の表現を豊かにする。			
	④表現の工夫	・自らの表現を工夫し、その向上を図ろうとする。			
	⑤聞くことへの意欲	・自分のものの見方や考え方を広くし、より豊かなものにしようとする。			
	⑦言語への態度	・発音、発声、速度、音量、言葉の調子、リズム、間の取り方、言葉の使い方などに関心をもつ。			
表現	②表現の適正さと工夫	・朗読・音読：文章の内容や特徴に応じた読み方を工夫して、適切に朗読や音読ができる。			
理解	①理解の力	・鑑賞・感想：自然や人物の描写を読み味わい、自分の感想や意見をまとめることができる。			
	②理解の要素	・話し合い：話の要点をとらえながら聞き、話の中心点を的確に聞き取ることができる。			
言語事項	①発音・語句・文法などに関する事項	・発音・発声：話す速度、言葉の調子、間の取り方、言葉の使い方などに注意することができる。			
	②漢字に関する事項	・新出漢字を読むこと、書くことができる。			

以下同様に個別評価する（省略）

11 授業を終えて

(1) 「群読」という学習形態は、教師も生徒も初めてで手探りのなか進めて行った。したがって、課題も多く欠点ばかりが目についてしまうが、生徒は短い練習時間と、検証授業のときだけやってくる教師を信頼し協力してよく活動したと思う。

(2) 風邪の流行で欠席が多く、当日初めて群読シナリオを手にする生徒もいたが、グループのメンバーが丁寧に説明し、工夫して練習をしていたのが印象的だった。

(3) 詩の内容により、男子だけ、女子だけ、男女半々ずつと3種類のグループだったが、男女半々のグループの声がよく出ていた。

(4) 男子のグループは、すんなり「群読」に溶け込めない生徒が多かったが、当日はグループ練習のときからそれまでになく熱心に取り組み、発表もきちんとできた。

(5) すでに暗唱できる生徒が何人もおり、生徒なりの課題を持って取り組んでくれたようであった。

(6) グループ別だけではなく、学級全体の学習活動として意識づけたかったので、全員群読も取り入れたが、ねらい通りに心を一つにして迫力のある群読となった。

(7) これらの活動を通して「漢詩」に興味が持てたという学習後の感想をもってくれた。

12 資料

(1) 「鑑賞」のために（学習プリント）

鑑賞　春暁　孟浩然

第一句（起句）　春眠不覚暁
第二句（承句）　処処聞啼鳥
第三句（転句）　夜来風雨声
第四句（結句）　花落知多少

◎詩の大意（だいたいの意味）

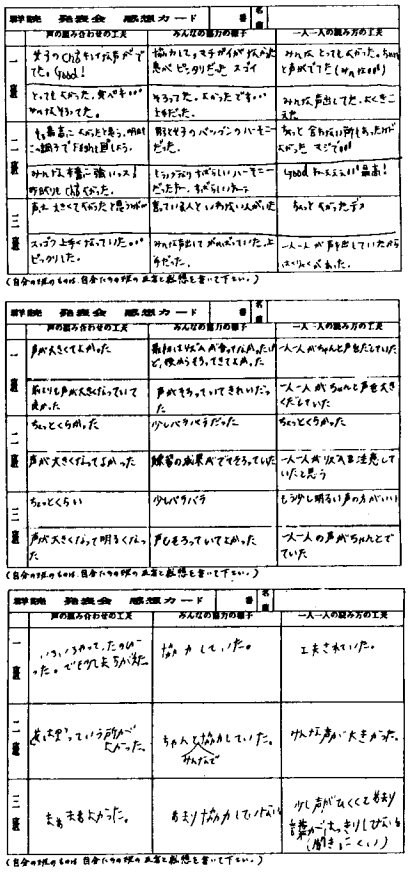
番
名前

◆絶句　唐代に完成された漢詩の最も短い形式で、四句から成り、一句の字数により五言絶句と七言絶句

◆作者の心情・情景
◇いつ
◇どこで
◇何をしている
◇花は

[語句　表現]
・孟浩然　（六八九～七四〇）唐代の詩人。名は浩、字（あざな）は浩然。湖北省襄陽の人で、その地方の

(2) 群読発表会感想カード



(3) 群読シナリオ

群読　シナリオ　「春暁　孟浩然」

名前	詩の言葉	表現
	春暁　孟浩然	
	春眠　暁を	
	暁を　覚えず	
	覚えず　（覚えず！）	
全	春眠　暁を　覚えず	
	処処　（聞く！）	
	処処　啼鳥を　聞く	
	聞く	
全	処処　啼鳥を　聞く	
	夜来	
	風雨の声	
	風雨の声	
	夜来　風雨の声　（声！）	
	花！	
	花！	
	花！！	
	花　落つること	
	知る多少	
	知る多少	
全	花　落つること　知る多少	
	春眠　暁を覚えず	
全	春眠　暁を覚えず　（覚えず！）	
	処処　啼鳥を聞く	
全	処処　啼鳥を聞く　（聞く！）	
	夜来　風雨の声　（声！）	
	花　落つること　知る多少	
	花　落つること　知る多少	
全	花　落つること　知る多少	
全	春眠　暁を覚えず	
全	処処　啼鳥を聞く	
全	夜来　風雨の声	
全	花　落つること　知る多少	

※春の朝ののどかな感じ。
朝、急いで起きなくてもいい幸せな感じをだす。

Ⅵ　研究の成果と今後の課題

国語の中でも古典、その中でも漢詩というのは一種抵抗感のある教材とされている。その抵抗感を取り除き、興味を持たせるためにはどのように創意工夫ができるのだろうか。２年生を担当することになったら直面する課題である。

前回２年生担当だったときは、初めてということもあって「基礎事項」も盛りだくさん、作品解説も詳細にわたり、教師は楽しいが生徒は・・・消化不良を起こしてしまったかもしれない。そういう思いがずっとあって、今度２年生担当になったときは、指導事項を精選し、生徒の興味にも配慮できるようになりたいものだ、といろいろな実践例を探していたとき、「群読」という表現活動の研修会に参加する機会に巡り会った。

そこでの研修内容や、さらに資料収集をして自分なりの指導法を確立したいものだと思っていたところ長期研修の機会に恵まれ、「群読」について取り組んでみることができた。

1　研究の成果

(1)　手探りではあるが、自分にとって未知の表現活動である「群読」に取り組み、音読から朗読、そして群読へと発展させる指導過程を実践してみることができた。

(2)　そのことによって、表現活動としての群読の可能性の大きさを認識することができた。

(3)　中国全図や漢詩の訓読文など、掲示資料の工夫ができた。

(4)　発表会の表現効果のために聴覚的にはバックミュージック、視覚的には色別のシナリオを工夫した。

2　今後の課題

「群読」について

(1)　グループの作り方について、作品の内容により人数、男女別、男女混合などまだまだ課題が残る。

(2)　群読シナリオについては、生徒によるシナリオ作りまで発展できなかったので、今後その指導についても取り組んでみたい。

「漢詩」について

(1)　基礎・基本の指導法については、フラッシュカードや掲示物、学習プリントなどさらに効果的な資料の開発をしてみたい。

(2)　「群読」以外に、意訳、意訳劇化、イメージの文章化、情景画などまだまだ表現指導に生かせる活動があるので、今後の課題としたい。

成果よりも課題のほうがはっきりと見えた研修期間となりました。それが一番の成果だったのかもしれないと思いつつ、４月、現場へ戻ることとなりました。

中頭教育事務所の新城トシエ先生、市教育委員会、当研究所、真志喜中学校の各先生方に大変お世話になり、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

＜主な引用・参考文献＞

家本芳郎著	群読をつくる	高文研	1995年
岩崎明編	音読・朗読を生かした指導の方法	光村図書	1992年
石田佐久馬編	読み聞かせから音読・朗読へ	東洋館出版社	1992年
教育調査研究所	紀要　第69号　中学校・国語科観点別評価の研究		1996年
北尾倫彦・金子守編集	中学校国語観点別学習状況の評価基準表	図書文化	1994年
太田昭臣・大西忠治編著	中学国語の授業２	あゆみ出版	1992年
長谷部実・白井理・中村純子著	古典の群読指導・細案	明治図書	1996年
中学校国語　２年　教師用指導書		光村図書	